北槎聞略

巻二

和書門 類
一八三〇一 號
一七八 函
二 架
一〇枚二軸 一二 冊

内閣文庫
和書 類
一八三〇一 號
一〇枚二軸一三 冊
一八五函
一一 架

内閣文庫
番號 和 18301
冊數 24（ 2）
函號 185 579

北槎聞略巻之二

○飄海送還始末上

天明二年壬寅の歳十二月勢州亀山領白子村の百姓彦兵衛か持たる船神昌丸に紀伊殿の運送米五百石并に江戸商賈等へ積送る木綿薬種紙饌具等を積載せ船頭大黒屋光太夫以下

日本政府図書
書籍館印
内閣文庫
浅草文庫

合船十七人同十三日の巳の刻ともづな
白子の湊を開洋し西風に帆を揚て
夜半ごろに駿河の沖に至りしに俄に
北風ふきおこり西北の風となり合て忽
柁を摧かれしより風浪ますます怒發
すでに覆溺も無きかぎりなりければ
船中の者ども皆髻を断船魂に備へ
おもひおもひに日比念ずる神佛に祈誓

をなし命かぎりに働しも風は次第に
吹まさり曙方に至りては狂瀾澎湃
として雷の百たびの如く勢山の崩るゝ
ごとくなれば船中倉皇として施
すべき手段もなければ帆檣をきり
捨上荷をも捨七八日が間は東へ〳〵と
吹流されし後には山も見えず渺茫たる
海上を風浪にまかせて揺こされ

なく漂ひしか程なく翌卯歳二月に
なり彼岸にも入けれハ風も南に吹変て
海上も穏になりけれハ柁桿を樅て
仕かて袷単衣の類を綴合せて
帆とし猶りそに縄二條をかけ何国
をもとハれしに走り居けるうち
船底に井伊家より便船に積ける畳
ありその二積ハのりしを見出しこれを

帆にかけて数日をしのきけれとも一向
為地も見えさりしか幸ひ三五郎
光太夫に向ひて云けるハかく海上に漂ひ
ていつれを果何国ともあてなし
神籤をとり太神宮の御告あらは地
方の遠近をもしらんと五十里百里
三五十里と五千里千里までを籤にし
謹而頓に洗ひ開き見けるに六百四十里と

ゝに神鬮なりければ錢八つの神鬮の
うちかへしにせよなどいふとかれともせめて
りの円ばかりにて今一度試んとて自身
再び鬮をとりて見るに又も六百里や
神鬮上りければ船中一同に色を
失ひける三月になりける頃は碇も二挺
まで波にとられ剰へ船の舳艫たまされ
損ぜしうへいづ方よりか水さし入

既に二尺餘も水湛へければ船中いよ〳〵
度を失ひしおの〳〵必死の覚悟を極
しに三五郎いひけるはかゝる時にこそ神
佛の御加護を祈るより外なし
手を束ねて死をまたんよりは何方
にいかみちのつきぬるやと神鬮を取て
見給へしとて船の名所を鬮り
記し御祓に着けるに面楫の一ツ間

といふ神籤なりけれハ急ぎて其処を
よぎつゝ称名に果して此が路をなる
まぜ即時に称號し木綿を
取出し幣につけて不測の危難を
のがれけりとぞ夫より船中にハ米を
積ざりしが糧食に事ハかゝざれども二月
あん来より飲水に乏しくなりしが
水桶に錆を生じ鑰ハ光太夫が腰に

佩居て日每に人數に割つけ遣ひけるが
かけれバ渇し尽ぬれバ舵のしまにか
こし水とて大樽に貯へおきたる水を
吞尽しに是もなくて飲尽し
今ハ云ん方なし水を絶事一昼
夜に及ハ苦しさの餘り潮を汲て
飲んとすれどもかわくのますこと
ならぬにハ皆々渇に堪ゆしに幸

其夜中雨降りけれバ楫櫓の事ハ勿論
哨船までを洗ひて雨水をうけ又
光太夫工夫して棟の四方に細き木を
つり舟中に孔を穿ちその下に
畄をうけ溜をなし天水を貯へける
其後ハ雨も稀にかゝりける故に
渇する事もなかりしに冬に付てハ雨
五月にもなりぬれバ洋中ハ雪も

降りしかバ寒さいよゝまされにし
何れも綿衣を着かさねてもしのぎかたく
より水手幾人ハ腹痛下利しけるが
みけるが七月十五日の夜亥の刻ばかりに
死たり合船の者ども艱苦に身體を
よわりつのれるゆへ誰云合ともなく
かれるも神佛へ祈願のうち幼日くに
三夜垢離をとりけれバ精力も衰へ

たゞ此ものハ活きても雀目になりしと執念ハ
物のあハれも見えさせ給ふ夜明を待て
死骸に沐浴させ髪を剃柵に入白木綿
にてつゝみ蓋の上に勢州白子大黒屋
光太夫船水手幾八と書記し其上ハ
木綿にて巻よし結ひ沈し海中に
沈めける其夜ハ雷雨甚しく翌十六日ハ
海上大にあれまし暮頃より大風雨
なり激浪天を洗ふに如く大風船の檣ハ
破り板子を吹揚火盆を吹飛し
新蔵が面に中りて半面を火傷せし
又ハ揚洋中に漂ふうちハ朝夕に
雲霧濛〳〵として島山の如く見ゆる
事あり地気を見るのみにしても
きらひ候ふうちに旭の昇に随ひて
次第に消うせ力を落せしこと数

度ありしかバ島ハ鷗の外絶て見
ゆることも天氣よき日にハ網引うち
かゝる艱苦の中にも糙米ハ食しかども
ことなれバ米を桶に入ておし杵を造
りかゝりしに搗始りけれども
雨天の時ハ氣にもかゝる精進ニハ雨
濡ぬれども厭ひて樓の上に轉び臥て
寢る者多くしかも餘りに長閑なれ

天氣續て船も動かざる程の凪には
すゞみかてがてらもなく退屈のあまりに
水手の若者共も博奕なとをしける
ありしも贏ちもし輸ちもし船中
まての事なれバ財失ひし者もさのみ
をしきこともあらねハ得し者も使用
も無き道なれバうましきことも
ありて爭ふ事もなくあひもなき徒に

退屈をしのぎてなぐさみとせし初の
かしましたるはなしにうきをいさかなすゝきあ
一身手足のぬしくたとけ合しゝ日数
かさなるに後くはしくに異議を
起しけりされは口論を仕出しかしの
争ある折あしく櫂のひかまへし必死也
極めしとたりけれは船頭親父 船中の賄
そう割船頭同組のこともを始 等の扱ひをもつて
は船中かとい三五郎をいつかりけしと

倒りまつてはこれかし海底のみいかへ迷
惑しけるも案なかり同十九日の暮ころに
三五郎海上にて昆布を見つけ船に
挑み近々しぬけりそへしと云ぞある皆々
大きに力を得いさみ悦びける同廿日
の暁に磯吉小鮮に乗出て嶋のぬき
こそのを見つけしかれば年わかき者の
事なれは仔細に見つけるも及けれ例の

雲の凝りかたまりしと見えしが其後に至て
卧のうるはしく夜明に小市楼に出寅卯の
方を見やるに靄のたちこめたるかなたに祢犬
嶋のかたち見えたりと船中の者どもを
呼わたせば皆々楼にかけ上りて見るに
うつふかりしも次第に晴渡り四ツ時頃には
山まもさやかに分ち雪のかゝれるも見えいよいよ
島と見定められば船中の悦かぎりなし

かくはしけれども柁をくだかれしまゝ今さらに
船をよせん事もなりがたし又わが
地方に風立なば眼前に嶋を見ながら
ふたゝびもとの洋中に吹戻されやせん
まづ人を陸にあげて艀を船に下し
直しく小さき帆を掛え縄を二條柁にむすび
あぢより潮のよい時刻をはかりて嶋に近付
四五丁計にあれて本船に碇をおろし

三五郎次郎兵衛ハ生得より病気ふて
枕もあがらざりしか本船の内ふて
哨船ふ乗せ置かしとて召れらし
太神宮の宮居を遷し 此宮居ハ今度恙なく持還りて
し粮米二俵薪四五束鍋釜衣服卧
具被までも積のせ光太夫ハ佩刀をさし
自分荷物の木綿一行李つみいれ合船
一同ふ乗移りて磯邊ふのり付しけり

一圓ふ木も生ぜざれバ小島なり兎角せる
間ふ此方の船を見つけ嶋人等十一人
何となく被髪ふて鬚短く面色赤黒
く跣足ふて鳥の羽を綴りたる襦の
かたちしたるを衣とし着棒のさきふ
雁を四五隻突結着てうちかつげ
山の腰を傳ひまかり磯ぎもとふ出合
くちぐちふ人ゝも兎ゝも更ふ弁がさし

何やらんいふことのもわからず一向に言語通ぜざれバ
光太夫思ふやう彼等も人類なれバ性情
殊なることなくハ愁のいろを示し愁心
だにあらハさバいかに夷の輩も志の
達せずといふ事ハ何かあるまじきとて
試に銭を四五個あたへて見るにやがて受
とりて木綿をとり出しかのものにあたへけれハ
悦びて拝みてこれをうけ近く

寄て光太夫か袖をとりてまねきしてあれと
いふに拝地光太夫同船の者に向ひ其ハ船
頭の役なれバ船を捨てハ行難けれバ
何ぞものいふ詞もしらねバ行て見ん
定て家なとも有べきかしと其辞をとゞ
見届まほしきよしいへどもこれを行かん
みんといふ者なしとのゝ評議なる
うちに清七次郎小市新蔵磯吉なと

斯て五人行て試みしとて島人の境に
従ひ半里計（此方の半里也）行て山の頂にかゝれハ
向の方にハ以前の島人とハ抜群の容儀にて
緋哆囉呢の服を着たる者両人鳥銃を
携へ立居たりしが五人の者を見るより
空炮を放しかハいつれも肝を消しけるに
近くよりて来て五人の者の肩を撫
背をさすりいとも[illegible]言語ハ

いふこのも通ぜざれハともかくもとて来れ
座しといふ所ハ海なれバ當人あり誘ひもせら
連て峠を越ゆれバ北の海濱一面に
見えけれバ人家も見へ一軒ならず見えて
此方の段々にハ哆囉呢天鵞絨の装束
着たる者いづれも鎗鉄炮をもち大勢
群なる所へ五人の者を伴ひ行けれバ
着議を拝ぬして麹も詰のぬきことの

前に連行戸を開きて内に入ると
見るに横二間半計長さ六七間計に地を堀
然して土際より梁を人字の形のごとくに
組合せ横木を渡し草にて葺たるもの
上に土を覆ひ真中は土間にして両辺に
板を敷きて床をかきまはし寝所なり
山中にて逢たる二人なれども海辺に
兵器を携ふる者等は大西欧羅巴洲

なる魯西亜國の人なるが初の両人はヒヤウドロ
ミハイロヰチ ツヱイ 一人はマコノ オノホと云者也
此地はアミシヤツカとて亜細亜亞墨利加二大
洲の間にありて魯西亜の本國よりは
數千里の東にある地なれども近来本國
よりも併せ得られにより 租税をも収め
又は土産を交易のためにも此地に添まし
五年毎に更替せらるゝなり 空炮を

うちよするは漂流人と見えし故悉く
上陸なしを禁じけり總じて彼
邦のならひにて禁じ事には鉄炮を
うつ事なりとぞ件の家はバラバラとして
魯西亜人の住居なり此島の人は皆穴居
也（蝦夷の風俗ハ夷俗の部に詳かなり）すなはち此処にて茶の如き
ものを與ふ後あらんには海邊の石上に
生ずる草の葉を煎じたるなり

兎角此島の人は甘きつけ 空腹に飲んとす
故口を指さし腹をたたきて見せければ
彼れは一尺計りなる魚を草に裹みて潮
蒸にしたるを戸板のごとき盤にのせ
何やらん白酒のごとき汁を木の椀に
盛り木の匕を添へて與へける此魚はスタ
チキイとて大なる鯨の類なり 汁は
サラナといふ即 黒百合の根を水にて煎じ

搗爛しありてゆり絶ることのなり
是此地の常食にて魯西亜人も此地に
在留の間ハこれを食せるよし此外にハ
呑魚雲膽海豹の肉雁鴨など食ふに充る
事なれど食事なきもれハ礒吉新蔵
二人を殊し兵蔵小市清七三人を
魯西亜人五人あまし鎗鉄炮など持せて道
かこみ彼の道とは引のつと西の方

の山手へ連行たる礒吉ありしか新蔵の
道をも通い侍ふ鉄炮をを持行
ハ凶室山陰に連行殺害せらるに極り
ありしこのとききちうしかし途を返す
命をかしも是までと一所に切りし事
なれハおのれ殺されて死を迎ふと
新蔵もあとも小屋の口にみなかそよ
ませしと喚返せいハ三人の者もかり

返りて濤を追付て引戻んと駆出をバ残りし魯西亜人ハ是を立寄りて引とゞめ漸く先に立し者ども三人を引連て立戻りしが跡に立たる兄弟者憤りて合図の面之危なりけれバ三人の者礒吉おもふやうかゝる異國の地に漂ひ来りし上なれバ到底ながらへ果無き命とも覺えし旅

ハ生死を倶にせんとハ思へども迚も別に無しとて此上に彼者共の怒に觸なば憂かる人のうき目に逢んもしらず雖し彼等の心に任せたらば萬一命を全ふする事のあるまじきにもあらず小市ハ年長き者なれバ新蔵と共に是非に留まりたる無しとて懇に暇ごひし今ハ何方へなりとも連行無しと志ろ

たゞしまたゐ会を拝みけれハ頭立て居る者
顔色和ぎ残りし二人に向ひ合指の
の先きを梅指の爪にてさすりながら何
ならん云ふり許いふとも廉略にハせさる
といふ言外に顕れけれバ何ゆへ乃と
おちつきたる別れしけり後にきけバ此二人
地ハ船場へつとめし二人とハ人質に海置
りうかりけるとかきしも小市磯吉ハおもへと

小屋にはいれるも三人の身のうへをきく海辺
に猟りせし者の事なるをかれこれ云ひ続
けるうち日も暮けれハ又も昼のごとくにて
来る魚を汁とをと興へける合食畢て
しばし老人一人来りタンバコといひて
點けざるとせしれハ却て烟草を檣木の
ぬきりのを持来る烟草の刃に削りとかせ
あみたる造りしたる烟管を添てせし

ちかに櫁木ハ桜の木なりしたもとの気味
甚烈なるかしをすれハ吮ゝきよし也
二人ハわら合せたる烟管を取せしか其の
烟草をのみはするあいだにありしの方より
二三千人が足音して入来る者何ゝの
さまゞに異形なり頭ハかしらまで両に
青き條あり鼻の孔も下唇に角の生
たる者なれハ儀吉大きに肝を消し

三人の者ハ殺害せられ今ハ我くハ木の
羅刹まん餌食にてらるゝ事と覚え
たりけるかれ小刀一本わすかしにみ
しとハ食われすして一個かりしを
刺殺して死んとも未ださけなは
也人とも赤手なれハ為方なく口中に
太神宮の神力を祈奉り身を縮
みなりて追てしハ立ゆり見てハ此

島の女あまた漂流人を見に来りしかど
ありし二人ハ漸く人心地になりて吐息は
つきながら更に物いはず老人皮の衣
を持来り寝よといふ仕形をなす
当お前件の皮衣を二人にきせまゐらせ被
とも臥ゐりしが月二夜日頃の疲にて
前後も志らず熟睡しけり此老人ハ
ヂヤミミイトロウイチと云ひしてカムシヤダリ

カムシヤツカの夫人をはなちなるが今ハ本国の教化に帰して
姓名をも改本国の人と同じく此地に来りしも
かしこき年老の者なれハ漂流人をよくとか
介抱致し由生年ハ七十餘なりしが
翌朝見さへ起されハ島人とも船中に
残し置たる綿衣を持来り其外へ
なるものハいよいよ我を害せぬ事を
なりけるにも初て安堵の思ひをなし

なしけり乾饌ハきものにて魚を用ひ
の汁を飲食しそのうして其日も
暮れけり三人の成行いかゞん便なくて又
舟場の方も氣をつけハしけれハ舟場へ
行渡しかと云をきくより言葉通
ぜずハさてしか仕形にて舟場の方を
指さしゆびさして見せけれハ会しく
せしめや臆つ渡き帯たる二人ハうちはし

云合しける罪深くしとも行先も見え
ぬとのさまハ海路の方に草むらにして
たゞよひける褌又光太夫等十人の者
ごとくハ五人のおとをえんとてあめりめくて
案し居たれバ不小呪囉呪の將來
しける者四五人来り先空炮を撃
近くしとより来る何色ん赤黒き
裸衆のごとききたるを見へ噴をつかんせ

これもまた何とも口きかず袖ばかりつまゝ
ためしにひとつの内に水手九百五識に
嗅（うぎ）て見るに烟草（たばこ）を粉（こ）にして葉（しやう）
をまぜたるなり先はポロニカ 即嗅烟也 俗に嗅たばこ
といふ和蘭（おらんだ）語にて スノイフタバコといふ 此国の人常に
用ゆるもの也右の国治立（うらう）することの
アーコフアノライチ ニビヂモフ こそ本国は
臣賈（おかあきうど）チガレーフといふ者の甲斐（てだい）にて皮

類（るい）を交易（かうえき）のためこの地に来りしなれ
ことの外なり光太夫 ニビヂモフに向ひ文（もん）
字（じ）を書き見せければ一圖（いちづ）に讀（よみ）浮（うか）ず
相伴ふなど彼方（かなた）よりもいろいろ書（かき）を
見せけれども光太夫此方（こなた）に一向（いつかう）通（つう）ぜねば
困りはてたる様に知る人もなく男女うち
しきりに見物に来る事夥（おびただ）しくその
内に日を暮らしけるうち一夜寝所（ねどこ）にかなり

ありあふ石にて曲突をつき釜を掛
飯をたき握飯にして喰ひ又
試にゆりて水に立する嶋人に〳〵くわ
ぬ一口食ひて残りをばうち捨る魯
西亜人はもらひて賞美の体にて食せ
しられ抑にも入れは磯辺の岩窟に
入太神宮の宮居をば小高き所に遷
臥被うち敷皆々臥りけるにステツパ
チエリ バビヲ カジモーフ アレキサンドルゴリアイノ
イワンカンタコフといへる魯西亜人終夜寝し
やらへ岩窟の竈にまもりおける光は漂人
等を安心して臥さしめんがためなり
明けて翌朝はおきいでて濱邊を見れば本
船の碇をすり断船は島のむかいぬ暗礁に
觸て船底を打破り上まはりのみ磯
際にうちよせられたる荷物は残らず

流れうせぬ魯西亜人ハ漁人なりけるよく
見のこ志れけれ光大夫ハ心憂けれバ眼を
閉てあんむきけれバそこを住家に岩窟の
うちに入て臥みたりしが冬かに
なりぬるほど人物さハがしきたる寄て
さし覗き見けれバ彼破船の中に酒
一樽ありしをみいだしニビジモフをはじめ
破損にみなのりてひたく酔ふしける何れ

甚醉ふる林ありのころより年を過ふ
りそそきける島人かれこれとみてうち
やましぬめあひけん破船のうちをさがし
索て又一樽ありき窺えどうちぬき
てまた汲て飲けるが忽嘔噦して吐捨る
これハ海上にて風浪劇しきおりハ船を
せし小鮮をる事能はざるなれ空樽をた
目を便し溜るを酒と思ひのみ

なりけれバ嘔吐せしハ殊ありけりとかゝる危
難の内なりけりいとゞちゞまりけり
可笑かりしがさしもいひけれバ猶うちて
いかなる事かとやみんせんと咲ひと志のび
臥被引かづきてかの狭き岩屋の内に臥る
が岸に繋ぎおきし哨船も夜の内
に碎け失る夜明てニビジモフ指揮して
三艘ハ流され來ハ病氣なれバ番人に負ハせ山谷に

かゝりしかバ杉よし小市磯吉に行合
互に無事を悦びける是より連て
魯西亜人の居処に至る家ハ二棟並びて
作り一棟ハニビヂモフが住居一棟ハ手下
なる者の居所なり別に倉あり制ハ
住に異なりけれど光太夫等ハ人
数多くして家居ハせまき事なれバ
甚狭ハ皆と倉の内に宿せしむ倉の

内にハ冬の儲に貯へたる乾魚并に厂鴨
等の干たるを積置けれハ臭事甚しく
し。堪がたきほどなり。衣服の間に入置
たる香嚢をとり出し火に焚て一夜ほど
凌ぎたりとぞ。土ニビヂモフ等ハ官府へ
商税を出し海獺海豹海驢等を島人
どもにとらせ烟草木綿皮船図あり小造な
牛馬の皮などゝ貿易し五年毎に

本國より迎の船に吏務の人など乗せ来り
其船に貨物を積て帰る事なり。尤も
嶋にかぎらず邊の所へ吏務の人を一年宛
のせ来りけれハ交代し。又他國の人を
一船に乗組て帆を張光太夫等がかの
地に来りしハ二月餘にもなりけれども
一通に言語も通ぜられたるもニビヂモフ
等の土地の人ならぬ事ハ着しはじめハ

其しるし迎の船ハ八月以来ふなと
いつれも船をさして志るさし或ハ手ふて
帆の形をなしおきて見せけれハ其
意を會得せしにや白圏を二十四かき
其上に半月の形を画て見せけり凡皆
しうりより表しに見ゆれハ廿四日三と
船の来るを判断し者何ゆ又ハ二十四
月を判ぜし者を何ゆと何ゆす其

日ころをまちつ着せしを迎の船の消息も
なかれハ拘ハいよし二十四月をと評議志て
迎の船もたまらなはよりや我しゆきせ
此嶋にハ捨おかれまじ我しもめすよ
みも便船を請てたとへ何いはいぬる
国もあせよ魂カふさく着たらばよき能
つくを無事なんと迎の船をのみ待て語
頻に守しりなうら其年八月九日の朝

彼者が父三五郎病死しけるが或時三五郎
一船の人を伴ひつゝ光たまふむかひ我に
年久しき船人ゆゑ殊に難船をも
逢程々の磨難を經し身なれば如
何ばかりのうき目に逢ふともさのみ驚くべ
まじ身許よりいえ来船人をも伴ひ
人の船長の家の業とする渡海の
功とも積ざりし身なれば今の世に出遂も

今初しの事なれバかれ是さる風土飲食に
傷られんハ必定なり云置毎事又
國元への書状なども認おきのよし十六人のうち
一人の云へ國元へ帰りぬ事もあらすれバ
その者にゆづりて家へもよと我にいひ
まかふためしてさりけるにもいはひ思ひまも
なき身なりし其許にハ家産をも廣き
事なれバなきかねとの処置等の残ゝもの

なき様にてもしく謀ハ書てありしを諫め
あれが甚八ハ却て先にかゝり光太夫ハ命を
全ふしてく今ハ本土に帰りけるを得たるハ
かの忠義にも運強き者なりしとや同月廿日
巳の刻に次郎兵衛同十月十八日卯の刻に
安五郎同月廿三日卯の刻に作次郎同
十二月十七日寅の刻に長次郎翌巳歳九月
晦日辰の刻に藤助追々に病死しけれハ

残る者とも日増に力なきのみなりし
なかなか生残りしとも故国に帰る事なき
便りもなく又此上の難苦に逢へも
さなりかされバ先だちたる者こそ幸ひの
身にハもあるにましけれど思ひし
事もありけれとも只命こそ大事
神仏の御加護にて再び本国に帰れ
無き道も有るへしと思ひなかし只節を

迎の船をのみ待ゐたりしが此嶋に半年余も
ありけるも此かゝるに言語通ぜざりしが
魯西亜人等おのづから漂人等が衣服調度
など見てはエトシトといふ事耳に
云ひけるが是はいかにといふ事やときゝ
きゝとりて又いひさまざまに見えけるまゝに先
其心を得たりしや其後吉兵衛何ま
まことなりしもわからず見えて解りしも

ある人より柑子一つ側に置けるを指
さしてエトシトといひければエトシトウと答
ければ汝は何と問ふ事と心得て
夫よりは吟味して書記しける程に言語も
よほど覚えけれども其事は弁じ兼ねる
ければ手に持て徒に月日を送り
よりて漂人はからずも ナキリイミ
ナッキスカ 丘ク ウニヤキ かぎりなく悲しみに

漁り海獺を捕へて活計となりしに杉口
し居られけるが或し事故にも通る故
なりしとの許ちの乗来りし船にて
助けられしてありしに本国よりの迎来
し若干を辺の島々へまつりに移転し
ガマンドルスカといふ島には皮革をとりけるに
ありしと思ひしかるに答へける其合
三年といふ七月に魯西亜の船来りけるが

打ちし如風烈しく港に入津能はずして
りその沖へ乗戻としつ風なみ長ければ
再び乗入んとせし折から又も大風吹
おこり同所の港よりは一里許下の方へ
入津をし風浪にて錨綱をも切
遂に破船しけるされども会船の人は御船
なく上陸し船具も追ひて取あげける
乗組の人数二十四人荷物は皮革を積み付

抱も去年月中旬にてせし迎の船さへ破
船せしなれバ來りての便も津軽迄も
力も落胸に載子の破船せしみよりこそ
かゝりし我よしわりへハ魯西亜へ
隣もおよばぬ国なれバ其国人に同船し帰
国せしことを我国に帰りていふまでもなし
されバ去りへかゝへまいりぬいきすに逢え
もまうりしてきてみれの舟の被きしさへ

かくすてかなしく見けりかれバ在嶋の
うちの辛苦おりしきる毎し去年に至り
てハ漂人等が衣類も見られ損じたる衣服
人の用けり鳥の毛衣又ハ海驢の皮の衣服
なしを清浄に着なかりしを其後
ニビチモフ光太夫等に云りかハ去後かゝる
幾附船の来るを毎しも待ち難し載く
ことも数年の在嶋中去後ハ帰ることを

頃日はかく破船せしうへは兎も角も
しして船を造り カムシヤツカへ渡りまで
渡りなむと夫よりは地續なれば陸のより
ともかく亜きりけりて其ます力を併せ
あはして魯西亜の船具光太夫等が船より
古釘又は帆縄なども取よせて漂木をも
ひろひつゝ一年計かゝりて六百石積
程の船をつくり立 魯西亜人二十五人光太夫

等九人乗組海猟海豹海驢の皮又食料
または乾魚干雁の類を積て未の七月十四
日アミシヤツカを渡り洋し千四百里 五百間を一里とし一間は唐方の曲尺にて七尺八寸八分ほどなるを
の海路を経て同八月廿三日
迄りて カムシヤツカに着岸し此所の邊境
ふは パラツカとて布にて幄の如くに
造りたる遮陽を張て此地に在勤せる
魯西亜人の妻子等二十人計マゴテといふ

草の実など採なり。此地の土人は蝦夷にひとしき者なれば、我国より郡官以下の有司多く来りて治め、湊へ船を入させをりて郡官コーノダニロヰイチヲヨニラといふ者なりしが、ニビヂモフトより漂人をうけ取り川船に乗五里計行て陸へ登り、光太夫等は郡官の家にて飢渇を八人ともバウシレイドーブレニーといふ郡官の書役

の家に寓せしむ。郡官はシクシテマヨルミ官にて、俸銀四百枚なり。此地に在勤のうちは千五百枚に添支なりとぞ。家内老小十一人下人は皆官役付の者なりけり。皆当年毎の交替なり。ドーブレ三十五の八人中は郡官より医師一人雑卒小吏各一人つけ置き、給事も郡官より給せし由。此地は人家凡二千計の小部落

なり擲茎の根庄ブチなどより乾魚を白酒
のぬき汁よりタラワ（草の名未詳）の実などを入るを
錫の銚にいれ熊手のやうなるものと小刀
大匕を添て出しける熊手は箸の代り
日本人のやうに此三品は彼邦の人日常
飲食の用に用ゆる品なり　図あり　翌朝は
麦の焼餅と件の汁を橘の木の巻合に盛
て供す。それの汁砂糖甘美なり。此根のこと

よりて濃しくされたるも何物たるを知らず色より
百合の根のごとくなるや何のことやらしれざりしが
其家の老女朝夕に小桶を携へ何地へか
出行暫くして帰り来る日々に違はざるを
いぶかしく礒吉怪しく思ひ何地へ行
くやと窺ひしに家の後なる牛欄のうちに入ぬれ
ば透間より窺ひ見しに黄牛と黒牛
を繋ぎおきて老女は右牛の乳を

しかるに人〳〵件の桶へ牛の乳を絞(?)り
一隻より一斗四五合もとると云へり惣名
彼白き汁ハ生揚かり名をハモロコしと云ふ
濃きものハ煮返しおりめてワリヨノイモロ
ことハいふ。これを破吉にくれども見え稀にけりき
事ふ忌し猪の者ども云ふやうはとも後ハ
同船の者絶て汁をハ食ざりしと云ふん
郡衆より麦粉乾魚牛肉等を贈

此れも肉食ハせざれども牛肉
なとハ川に返し近頃五ツ月計帰路
せし同麦の粉拂底ふなりて鮭と乾
しおり左ブチヤ魚の名の食しおりしが
十月に至りハ麦ハからはん魚も殆と食し
尽し此頃郡衆より食料ぬかり
無き物に在てすでに〳〵も死せんとも
かゝる饑饉の折からなれハ少しの貯

ねがことのまゝものまじくの用意ふかゝらし置て
せざりけれバぜひなく二日が間粮を絶て
みちけるが漂人ハ顔をなつかしアミシヤツカ
の如き孤島をしられのゝ国境にまちて
却る饑死に及ぶ事こそ悲しけれ抑
我々いかなる不運の者なれバかくまで
艱苦に陥りける事よとなげき合ありしも
理りなりかし或日郡省の属吏近在に牛
あるを聞し早速に屠りて彼二ヶ
りけり何ぞもハ伊勢ふらんの生れ
なりとて日頃獣の肉をバ食せざれども
此期に至りては禁忌をなす身ハ饑
死するより外ハなし先此牛肉を食ひて
一命を繋ぎ食糧の足する時に死すも
俑も名も無き事なりと勧めて利害を説
きかせけれバ漸く実にもとおのひしくち

も磯吉ハ人よりさきに小刀をとりて
一塊きり食ひけれバ先をあらそふ若者ども
われ／＼も切て食ひけるまゝ人々ハ
牛肉壱斗計を八人にて一日の食とせり
凌ける宿の若者共ハ眼前に牛肉を見
ながらも窓より給ることのなけれバ猿に食
奥きまゝ猿の木の如く水に魚の
子をとまずして食ひける術に困りはて

られぬ光景なりしと也 此うちの光
太夫ハ郡なのうちに病けれバなりしな
かしも食物等すべて不自由の事なれバ
ありし八人の若者ハ牛の股一月を二十日
計に食ひ尽しハ牛肉百五斤に麦一
斛計入て煮熟しその汁を啜りて二股乃
牛肉にて二月余の食をつなぎみけるが
氣分ハ常にかはらず健康におぼえけれど

次第に精力つかれ足よわりて歩行も
やみて自由ならねど今は為方なき事なれば
宿の主の撒みて梅の木の外皮をさしあ
たへしを水に浸して食ふに噎につまりて
中々咽に下らざれば餓死せんよりはと先
かくて四五日食ひのばしゝが危難の中に
四月十五日辰の刻に與惣松同月十二日寅の刻
に勘太郎五月六日未の刻に若菊病死

そもいづれも飢渇なしたる病症にて
腹より足まで青黒く腫後には齦腐り
死ぬるチンカといふ病なり（按ずるに和蘭にて此病をシケウルボイクといふ即醫林集要醫宗金鑑等に載たる青腿牙疳の症なり）
人々いよいよ力もおち
つかれきはまれども宿の者どもは云やうは
いつれも志のきゝし飢饉も今は志なし
ぐ秘有れ長く五月に入れば浦に滑ぬれば
おぼしく魚猟なければ食物に事

かく津ハ河ぐちをさしてちかをつけてまち
ゐるが確としの淵を解バキリチイと
いふ小魚 蝦夷の方言 海より河に泝る河の面
黒みわたるばかり一とはふなりて押来るを
網にてとり水瓮に入て喰ふにその
味美にしてたとへんに物なし生無く
生のまゝハ塩甚掃底にて価最貴き故貧
賤の者ハ常にも塩をバ用ゐてなる

生魚にて十四五日ハかさゝハ志のまゝにて生魚
なり漸かくわりしころにハ左ブチヤと云
魚よりもまた是を網にて取る婦女子
業にて鱒の腸を樽につけ流し網
にして大抵日毎に三四百計を取る漁
又生魚をもつくることにハ早五月の末六月の
節になりて鮏の来れ初る頃になりたり
鮏ハ生き海より来れるもしらかずとりてハ

夥しく川上へ押上腹をさき破り臭
をつきなどして自死するもの少からず
如きハ土人ハ食料にハせざるなり
一種大蛇山多し獣をとりて肉を食
料とし皮をハ衣となしまた耕作ハ
せざれども常にハ飯食に乏しき事
なりとぞ同六月十五日加比丹下邸なり テモヘ
シンポタイチ ホッケイイチ 漂着 クシャンテンマチ

ベタイチ同船をもて上陸を発し チギリに
移し船の長さハ五間計幅三尺餘獨木
を刳りてつくり一船に七八人ほどづつ付
乗かこし其用之人ハ水手なり上陸
一行の人数漂人六人魯西亜人十五人三四艘
に分乗組川筋を溯りて凡十三四日にて
上陸し山路を一日ほど越て又船に乗り
今度ハ下り船なれハ瞬息の間に数十

里ほど下りて七月朔にチギリに着岸せし此陸行程三百七十里川筋なと小驛なりて舟路ハ二か月冬ハ氷の上を橇にて犬に牽せ渡るなり　扨陸に上りて光太夫ハ馬にのり其外ハ歩行にて郡官の案内に從ひも人家百四五十の小邑なり　此より程此地を立てヲホツカに渡る舟を仕立て

船中の食糧價物等迄積載る間遅滯して用意とてに調ひけれハ同八月朔日にチギリを開帆す船ハ四百石積程にて梶ハ一挺なり　ニテモヘヲシポウイチ光太夫以下乗組人数多くのりし故出帆より二十四五日もとなり食糧も尽て乏しく成けれハ一日に両度宛茶碗にてもりせし　人々に分配し食物ハ

チレムチヤ松前よりアイバカマといふ草の
　苔葱のたぐひなり
塩漬のみなりしが公私の者ども大に
迷惑し遠道より上達せんとせり
評議ありしからうれし順風吹起り
かくしてヲホツカに着船せし海路八百里
陸路なとは二千五百里ありといふ此所にも人
家二百計あるに過ぎず郡官イワンガウレロウイチ
コヲフより光太夫に銀三十枚其外なん

者どもへ二十五枚宛與へける光太夫マコ
ツカよりは人家もなき曠原なりしが露
宿の用意に右の銀にて皮衣皮帽
皮の手袋皮の韈等をかひととのへカムシヤツカ
ペートルガラヲニチギリイチガ等より税を
也と海獺海豹貂皮鼬皮の類をとりて
何つ年々本国に送るワシレイといふ者
セリザント一人押送の兵卒三人此地に

在邦のミロシ ステフパノヰチ ビリチウコーフと
いへる医師今度任限をはりてイルコツカ
に帰りしとて書面を伴ひ外にポルトカリツ波尔杜瓦尔国なりの人一人ベンガリツ榜葛剌国なりの人一人
是ハ先にメズノイヲストロワにて破船せし
者どもなりアンゲリツコイ諳厄利亜国のカラビレを
以て大船にキタイツコイ支那ポルトガリツ波尔杜瓦尔
フランツース払郎察ベンガリツ榜葛剌等の人乗組合

船六十二人交易のためボリシヱレツカに来り
交易をとげしかどガマンドルスカの沖に掛りし
カムシヤツカへも程近きによりて悦びの酒を
汲みて沈酔のあまり熟睡しけるに夜
半俄に大風起りて船危きにより水手等
錨纜をきりて捨塊方によせんとせしかど
船司案針をきゝなれりと別に大錨を
おろしかけ留んとせしうちに風浪

なをしもはげしく遂に破船しけるに
いづれも纜碇の者どもなれバ六十人一時に
魚鼈となりて右二人計ハ酒量なりし
酒をのまざりしゆゑからうじて塊方に
游つき魯西亜の人に助けられてカムシヤツ
カにきたり去年光太夫等か着岸の
十日計前に便船にて追てボリショレツカに
渡りみなを送りし時節又陸地を離れ

しと光太夫等と同時に住所に着せし
其此商人ハ後にイルコツカにて姓名を改め
波尓杜瓦尓の人ハヘヲドロ ヲシポワイチ シビリコーフ
榜葛剌の人ハヨドロ イワノワイチ クチシツーフと
名のり商人となりて永くかの地に
留りしとなり 榜葛剌人ハ昆侖奴なり
しと其外ヤコト 通事ヤコト夷俗なれバ部に詳なり
二人光太夫等六人都て十七人同九月

十二日ニヨホツカを出立してそれよりマコツカまでおよそ千十三里の間絶て人居なき所なれバ食物ハ二度焼たる麦の餅二度焼は日を経ても損ぜず牛肉の糖露脯にありしをまぶしたるなりパラツカ布の幅あり図あり馬草等にいたるまでも皆馬に積て行事なり半途にて雪に遇ふ時ハ木の枝を折て其上に皮を敷て臥なりし又馬上にて手足凍えて

付ハるをとりて歩行し身ハ許あそバれけるより又馬に乗りて行ふマコーツカへ三百里計にかかれバ所々に人家ありてこれに宿る官物を押送する事なれバ宿々にてハ牛をころして馳走せしとぞ同十一月九日マコーツカに着此所ハ人家五六百計にて頗る賑ハしき所也郡官ハイワンギリコレウ字コヅローフ ウゴレインとて官ハポルコルニカなり

カムシヤツカ ヲホツカの郡中よりハ大分限と
見ゆる也 妻ハ去年離別せし由 独身
なれど上下二十人計なり 家ハ二階造なれど
極粗なり 住所なれども光太夫に銀三十枚其
外の者へも古衣を施せりける 同十二月十二日同所
発足 ワシレイダニロウイチブシニヨーフといへる従
卒一人加り 一行十八人なり 住地ハ甚
東北なれバなる故気候極めて寒く

沍寒の時ハ往来の者皆皮の衣を着皮頭巾
をかむり 貂皮の衾に左右の耳をさし入
鼻より以下を掩ひとゞめたれバ
血脈凍沍して包まざれバ耳鼻脱落し
又ハ頬先なども割さく事もありて爛る也
六七八月の間ハ太陽の躔度地平に近のころなれど
夜も大かた曇りなる昼よりも明らかなり
冬ハ雪明りなれど火把等をも用ゆるに及ハ

さはあれ行者ハ昼夜をわかず地上ハ氷雪
ふして石金よりも堅く氷河となる旅
行者橇（図あり）をもちひキビツカ（図あり）とて
皮ふてつくりたる輿のことくなるものを置
これふのりて或ハ荷物をつみ七馬或ハ六疋
ふて牽せらるなり此所よりイルコツカ
まで二千四百八十六里四五百里か程ハ此所
猟師ふヤコトの住居あれども又まれなりき

ハ絶て人居なし八九里毎ふ官駅ありて
馬を替る遠ふ馬ふ付たる鈴の音を聞
きゝはかねて馬を備へおき即時ふ
つぎかへてかしも遅滞する事なし
初の馬ハ直ふ其駅ふとゞめおきて又
通る旅人ふつけてかへしもとの駅へ
帰るなり馬士ハ真先の馬ふ乗り
鞭をとりて指揮する右の如く人家

旅居にもなきてはなれは飲食起臥(おきふし)
ともに梼の内あそ調(そのゝ)かなり柳も一行の
人くは酉の二月七日に逃(てが)ねし　イルコ
ツカ山覚しるか

内閣文庫